

國學院大學學術情報リポジトリ

発題2 高大連携を見据えた国語教育

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 綾川, 浩史 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001324

〔発題2〕

高大連携を見据えた国語教育

國學院大學栃木高等学校教諭 綾川 浩史

「公人」として生きるために必要な力

國學院大學栃木高等学校国語科教諭の綾川と申します。本日、十五年ぶりに母校のたまプラーザキャンパスに帰って参りまして、このような形で私が、たいへんお世話になった先生方や日夜国語教育を研究されている先生方の前で話すとは思っていませんでした。こんな貴重な機会をいただき、成田先生、ありがとうございました。

私事なのですが、三日後に私、三十七歳になります。周りから結婚は出来ないだろうというのをずっと教員になってから言われ続けていたのですが、皆さんのお言葉を負けるものかという力に変えまして、私、



今年八月に結婚致しました……。(拍手) ありがとうございます。それで今日妻に、妻い先生方の前で話すのだということ先ほどLINEで送りましたところ、「妻い先生方をみんな

私だと思って話して」と言われました。今、改めて立って、その見ようと思うのですが、全く私の妻のように思えず、かなり緊張している面はあるのですが、私の実践例を一つの高校の例として挙げさせていただきますので、終わった後に何かアドバイスをいただければありがたいと思います。

お話しさせていただく内容は、「高大連携を見据えた国語教育」ということですが、もちろん系列校ですから、主に國學院大學に進学するというのを念頭に置いて授業をやっております。ただ、大学に入った後に生きるというよりも、もう少し幅広く私は捉えています、大学生をもう大人と捉えています。大人の定義は何かと申すと、まず生徒たちには「公人」として「私人」という言葉を最初に教えていまして、「公人」として生きるために必要な力を国語を通してつけたいと私は思っています。その必要な力は何かと申し上げますと、まず「不特定多数の人と直接つながる力」を育成したいと思っております。もう一つは、他者の知識や知恵を借りながら課題を解決する力を育成して欲しい。この二点を念頭に置いて国語の授業をやっております。

高校生の特徴（読書・コミュニケーション・言葉遣い）

なぜそのように思うかといえますと、高校生の特徴として三点、これが私としては非常に気掛かりな点がありまして、三年前から授業の形式を大幅に変えてやるようにしております。私が担当してきている生徒に限定されるものではあるのですが、一点目は「読書」についてです。平成二十七年、全国学校図書協議会が調べた読書の冊数を調べてみたのですが、小学生が一・二冊ということ、中学生が約四冊ということ、高校生に至りましては年間一・五冊が全国の平均だそうです。一年間でそんなに大作を読んでいるとは考えられないのです。そこを考えると、今、現場の私のクラスや担当している生徒たちを見ると、これは平均的に全員が一・五冊ではないと思います。読んでいる生徒はかなり本を読んでいます。読んでいる生徒の中には、私に「この本、先生読んで下さい」と貸してくれる生徒もたくさんいますし、また常に時間さえあれば本ばかり読んでいます。私のホームルーム、朝も私が来るまでずっと本を読んでいます。私が何人もいますし、ロングホームルームという五十分間の週一回のクラスの全体の決め事などをする場合も、話し合いをして、私が話して、また生徒たちが話し合っているときも、自分の意見を言い終わるとずっと本を読んでいるというように、本の虫みたいな生徒も中にはいるのです。

ところが、逆に全く本を読まない生徒は、本当にこのまま人生で一冊も本を読まないのではないのかと思うような生徒もいます。そのような生徒に対して、私は教員の勧め方次第で読書

量は増やせるというふうに考えています。まずは、私が高校時代に習った先生に教わったことなのですが、特に亡くなった小説家とか作者に恥じないような授業をやるべきだと言われています。基本的に、例えば『羅生門』をやったときには、後ろで芥川龍之介がいると思つて授業をしなければいけないことを言われていました。現在も『山月記』を今やっているのですが、その時は中島敦がいると思いなさいよ、と言われて、その作者が悲しまないように、他の作品の魅力も含めて話をしていきますので、結構そのような話をする、その作者の別の本も読んだり、また話題の本で高校生向きの本になります。結構生徒たちは読んでくれて、クラスの本当以上に読んでいて、あの結末はどうなのですかというように、読書が話題になるようなことも出てきます。その読書について、気になる一点目として挙げました。

二点目は「コミュニケーション」です。特定少数としか取れない生徒もいます。もちろん、そのような生徒ばかりではないのですが、例えば一年次に学校になかなか来られなかった生徒、いわゆる不登校に近いような生徒が、クラスが変わって一人話せる友達が出来たことよって欠席がゼロになったという例もあります。自分からつながることが非常に苦手な生徒がいますので、これは時代、社会の変化もあるのかというふうに思います。直接的につながることが苦手な生徒が多いので、授業を使って練習するしかないのかなと思つています。

理想は話せて書ける生徒の育成ということを考えているのですが、どちらかに偏った生徒は結構います。授業中べらべらずと話していたい生徒であったり、とにかく話さないのだが、書

かせると凄く書く生徒もいます。自学自習の記録を週に一回、クラス全担任が、勉強の記録と、あと五行、一週間のコメントを書くものがありますが、その五行をまたさらに半分に分けて定規を使って切り、十行で本当に五ミリ程度の文字でびっしり書いてくる生徒も中にはいます。その生徒はクラスでは一切会話をしないというようなこともあるのです。ですから、私も「思っていることを書いてみなさい」と言うと、結構文章にすると書いてくる生徒がいるのですが、授業中の発言は全くしないというようなこともあります。ですから、そのバランスを整えるためにはどうしたらいいのか、ということも考えています。

最後の高校生の特徴は、「言葉遣い」なのですが、同世代にしか通用しないような言葉を平気で「公人」としてあるべき場面でも使うことがあります。やはり語彙が少ない点もあると思うのですが、例えば遅刻しそうなった時、もしくは子犬を見た時、もしくは、私は柔道部の顧問なのですが、オリンピックのシーン、凄い「一本」を見たとき、これを全部共通して同じ語で言うのです。遅刻をしても、かわいい犬を見ても、柔道の一本シーンを見ても、全部「やばい」という一言で括る生徒が多いのです。また、挨拶につきましても、おはようございます、こんにちは、いただきます、さようなら、を全部「あーす」と言う生徒もいるのです。私は、言葉遣いはその都度その都度必ず、「あーす」と言うと生徒を止めて廊下では訂正するようにしています。今日この学内でも何人か学生さんに会ったのですが、全ての皆さんが、おはようございますとか、こんにちはとか言ってくださったので、「あーす」と言われたらちよっと聞こうかなと思ったのですが、さすが國學院大學だと思いました。

授業の特徴（「基礎日本語」、「コ」字型）授業

この三点を踏まえまして、授業の特徴を実践例として二点挙げたいと思います。一つ目が「基礎日本語」という授業でして、大学の方でも実践されているそうだし、また同名で本校の三年生対象にも先生方が来て下さってやって下さっていますが、こちらの「基礎日本語」は本校の学校設定科目としてあるもので、内容としては全く違うものになっています。「國學院大學進学クラス」が、今年大学四年になる卒業生からスタートした授業なのですが、この「基礎日本語」は約千五百から三千文字の文章を全て百字に要約するというトレーニングをしております。これは、読書不足を補うためにも多くの文章を読ませようということ、基本的に二時間かけて一つのテキストを要約し、その要約したものを私が全て添削して評価を付けて返すというような形で、定期試験も行っています。定期試験は、一回授業中にやった文章だけではなく、初読の文章も出すようにして、文章を的確にインプット出来る力を養うようにしています。

「基礎日本語」のガイダンスに「要約することの意味」ということが書いてありますが、与えられた情報を全て記憶し、全て人に伝えることは難しいので、要点を集約する力が重要になる。情報のポイントを即座に掴み、相手に分かり易く伝えられるようになるということと、この「基礎日本語」は大学に行っている方でも困らないようにということ、高校生のうちにたくさん練習をさせておきたいという意図があります。この要約が中心になります。先ほどの後藤先生も仰っていましたが、小論文等の練習もこの授業で行っているということです。

次に「コの字型」の授業とは、様々な現代の社会の変化に応じて子供たちも影響をたくさん受けていますので、それらのことに対応するために、授業の形式を講義型の教員対生徒の対面型から「コの字型」に全ての授業を変化させています。これは私、ホームルームをやる時も、うちのクラスはこのような形で全部行っています。講義型の形は、知識の伝達を一齐に行うという意味では非常に便利だと思うのですが、顔が見えないということ、携帯電話やパソコンを通じたコミュニケーションに慣れている生徒は、相手の表情を読んだり、相手のしぐさ等で感情を読むということが凄く苦手な生徒がいます。ですから、「コの字型」にすることによって基本的に全員の顔が見えるということ、コミュニケーションの練習にもなっていると思います。また、このような形でやっている他のメリットは、内側にいる生徒たちが外側をむいて、四人の班をすぐ作れるようになっていきます。グループ討議もすぐ行い、また戻るということで、そのような面でも、この「コの字型」の授業を私は三年前から実施するようになりました。

しかし、板書は非常に書きづらいというデメリットがあります。「現代文」のガイダンスに書いてあるのですが、授業の形式は「プリント記入形式」にしています、全てノートに書くのではなく、考える時間を増やして、より多く書くために、例えば文章の本文は私が全て書いて、ある段階で考えさせる内容を多くするようなプリントを作って、穴埋め形式とかではなく、この時登場人物はどのようなことを考えているのか、例えば今、『山月記』をやっていますが、どの部分から虎として自分は話し出したのか、その根拠と理由を書きなさいとか、そ

れを考えるようなことをやっております、黒板一面にびっしり書くということは殆どありません。逆に書かないぐらいのことが多いと思っています。正確に教科書の文章を写すということもトレニングだと思っていますので、そのような形で、教科書に書いてあること、それをしっかりと写す、もしくは自分の頭の中で考えたことを書くということを中心に行っていますので、あまりデメリットはなく、板書については、やっていて気に掛かるところではありません。ですから理想としては、今、アクティブ・ラーニングと同様にICT教育というものが言われていますが、そのタブレット等を使った授業と、このような形を並行すれば、さらに良いのかなというふうに思っています。

また、授業の評価基準も変える、ということも生徒たちに言っています、チョーク・アンド・トークと言われる講義型、チョークとトークを使った授業に比べて、本人たちが話したり考えたりの時間がメインになりますので、静かに座って板書しているからと言って良い態度ではない、そういう態度は、この授業では逆に悪い態度だと価値基準を変えて、このように話してからスタートをしています。教員一人一人が対話するということは、なかなか授業中は難しいのですが、この形でやると、モデルが通るランウェイのように中まで入っていきけるのです。一人一人の中に入っていくたり、様子がよく細かく見ることが出来ます。「小さなつまずき」を放っておかないということ、私自身も気付き易いですし、あとは生徒間でも「今、先生は何て言ったの?」とか、「辞書どこ調べるの?」とすぐ聞きなさいということ、で、「小さなつまずき」を放っておかないという対応も出来ると思っています。それで、最終的に皆で協力して答

えを導き出すということで、この「コの字型」を使った授業方法は色々なパターンがあるのですが、例えば全ての班のリーダーを決め、話し合った内容を、リーダーが情報交換ということで各班を回ってきて元に戻って、最終的に班にフィードバックするとか、色々なやり方がありまして、とにかくみんな考えて答えを出していこうというやり方をしています。

では、実際にコミュニケーションが苦手な生徒はどうなるのかという事例で、つい先日、授業中にあったことなのですが、一切友達と目を合わせる事が出来ない生徒がいるのですが、その生徒が、何か勇気を持って自分から言ってみなさいと、相手が話し掛けてくれることばかりではないよということで、昨日頑張って話し掛けていったのです。そのようなところも私は見逃さない、ということが凄く大切だと思いますので、授業を終わった後に呼んでよく頑張ったなと言ったところ、「現代文」と「基礎日本語」が二時間続いている日でしたので、次の授業でもう一回頑張って話し掛けていったのです。

ちよつと国語から離れるかもしれませんが、私は柔道を今もやっていますので、この「褒める」ということを私の中では「褒め固め」と言っているのですが、何か良いことをした時に徹底的に褒めると、もう逃げられなくなるのです、子供というのは。またやらなければ、ということ、例えば服装が悪かった生徒に指導した時に、本当に素晴らしい、君はみんなの見本だと言うと、三年間絶対にネクタイを下ろさないのです。

話を元に戻します。この「コの字型」の授業は私の中で課題が多々あり、グループ討議のタイミンクと時間配分が凄く難しいです。例えば、一個の教材のどこの部分でグループ討議をす

るのか、やはり時間がかかるのです。時間配分も、例えば一人五分間で考えましょう、その後五分間グループで話し合います、また十分間みんな話し合おうと言うと、大体二十分か二十五分一つの問いにかかってしまい授業の半分を割いてしまいます。ですから、本当に核になるようなところ以外は、なかなかグループ討議はやりにくいというようなことで、課題の一つになっています。

また、他教科での実施ということで、私が幾つか「コの字型」を実践している学校を見学させていただいたことがあるのですが、全ての教科において実践している学校もありました。例えば体育のサッカーの授業で、ヘディングはどこにぶつけるのが正しいでしょうかということでもみんなで実証していく授業があります、おでこなのか、頭頂部なのか、横なのかということ、そんなこともコミュニケーションを取りながらやっているということで、他の教科と連動しながら全体でやっていくと、国語力向上、国語は基本だよと言われていますが、それにもつながるのではないのかというふうに思っています。

最後に、高大連携という話とちよつと違うかもしれませんが、私が国語を教えている際に意識していることは、学習指導要領の「現代文A」の中にも「社会生活の充実を図る態度」が目標と書いてあります。「現代文B」と「古文B」におきましても、「人生を豊かにする態度」を養うということが書いてあります。そこを必ず生徒に話しています。「人生を豊かにする態度」は国語と何の関係するのかというと、やはり選択肢が増えるということだと思っています。自分の考えだけでなく、色々な人の話を聞いたり、色々な人の本を読んだりすることで、人生の

選択肢が増えることを通して自分の人生が豊かになっていくのだよ、という話をしています。

これもまた私事なのですが、「国語は役に立つよ」ということをとにかく生徒たちに私は言いたいと思っています。私は結婚する際も非常に国語が役に立ちました。妻は英語の高校教員をやっているのですが、実は同じ学校なのです。妻と付き合っていない前の段階で、公私混同だとよく言われるのですが、私の本を貸して下さいと言われて貸したときに、大量の附箋が付いて返ってきたのです。人の貸した本に附箋をつけるなんて、何て失礼な人なのだと思いはしました。ただ、「綾川先生を幸せにする会」という会が結婚をするまでありまして、その会長に相談したところ、それは「好きという意思表示だよ」とアドバイスをいただきました。その後、私も彼女から本を借りて附箋をつけて返すようにしました。附箋だらけの本がお互いに増えていきまして、私が気になった所に附箋が貼ってあったので、そこで感性が一緒だなと思ったのです。また、告白するときに、エクセルで彼女の長所を百個書いて渡す方法を当初は考えました。しかし、ストーリーカーみたいに思われそうなので止めまして、短歌を彼女に送ったのです。そしたらOKをもらえまして、国語は人生に役立つのだぞ、ということ話をしています。

最後、まとまらない話になったかもしれませんが、とにかく私は、「国語」という教科に、古文と漢文も含めて、凄く自分自身の人生を豊かにしてもらったという思いが強いのです。ですから、私は国語を通して大学、そして社会人になっても通用するような人間教育が出来ればというふうに思っています。今回、今日も素晴らしい先生方の発表をお聞きして凄く勉強に

なっていますし、これからの先生方の話も参考に、また自分自身も勉強していきたいと思っています。参考になったか分かりませんが、以上で私の発表は終わりにさせていただきます。どうもありがとうございました。

